

## おらほの最上川学 朝日町五百川峡谷編

最上川の荒砥～左沢間およそ25kmは、古くから「五百川峡谷」と呼ばれてきました。最上川の中で、唯一ここだけが連続する瀬を持っていますが、その流れは、ドラマチックな歴史を残し、私たちの生活や環境に思いがけないメリットをもたらしてきました。第一回目の最上川学では、まず「五百川峡谷の誕生」と題して地質研究を専門とする佐竹伸一氏（常盤）に、なぜ五百川峡谷ができたのか、その成り立ちについて教えていただきました。以下、講義の一部抜粋になりますが、ご報告致します。

### 朝日町宝ファイル No. 0601 「五百川峡谷の誕生」

人類が誕生する第四紀という時代をむかえると、それまでゆるやかだった地形は、激しい地殻変動によって彫刻をほどこされることになります。山はより高さを増す一方で、盆地は沈降を続けながらも隆起した山地から運ばれてくる土砂で埋め立てられていくことになったのです。

先に述べたように激しい隆起活動が始まる以前、最上川はすでに本地域を流れの場として選んでいました。川幅は現在よりも広く、ゆるやかな流れでした。しかし、周辺の大地が隆起していくにつれて、そのような環境は激変していくことになります。水の働きによる浸食量より大地の隆起の量が上回れば、川はその流れを変えてしまいますが、浸食が隆起の量を下回らないかぎり、川はより深く大地を削りこんで周辺は切り立った峡谷となります。最上川の浸食の力と大地が隆起する力がせめぎあい、数万年の時間をかけて五百川峡谷が誕生したのです。

こうした地殻変動は、山形県においては村山変動と呼ばれており、60万年前頃に始まったと考えられています。この変動によって、それまでのっぺりとした丘のような存在にすぎなかった朝日連峰が、断層運動を伴いながら激しく隆起し、現在のような高く深い山岳となっていきます。地殻にできた亀裂からマ

グマが上昇し、月山や蔵王山が誕生したのも同じ時期です。五百川峡谷の誕生は、こうした激しい地殻変動と一連のものなのです。

（中略）

五百川峡谷の最上川にはたくさんの瀬があり、最上川において特異な場所となっています。瀬が多い原因として、隆起帯にある五百川峡谷では岩盤を削りこむ流れであるために川床が浅いということ、最上川の中上流部にあり比較的に水量が少ないこと、最上川を横切る何本もの断層が存在していること、朝日連峰の主峰・大朝日岳を源流とする支流の朝日川からたくさんの花崗岩礫が供給されていることなどが考えられます。

（一部抜粋）

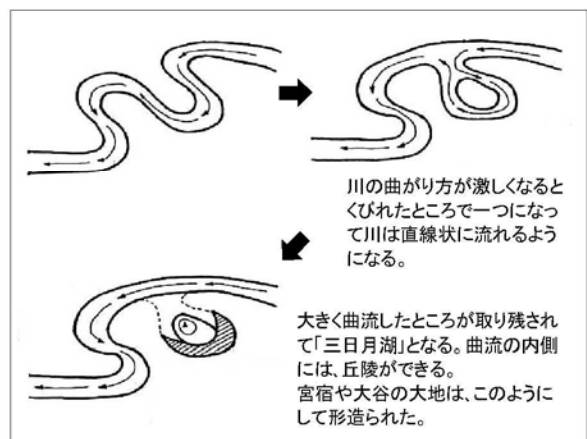


図 還流丘陵と三日月湖の形成



#### 佐竹伸一（さたけ しんいち）氏

昭和57年3月 山形大学教育学部卒業

山形大学理学部教授（県活断層調査委員会委員長）の山野井徹先生に師事。

現在、河北町立谷地西部小学校教諭。山形応用地質研究会幹事。朝日山岳会副会長。

現代俳句協会会員・俳誌「小熊座」同人。

著書「朝日連峰の四季」など。また、「朝日町町史 上・下巻」に執筆。